

日豪の学校制度・文化的背景の比較からみる、

日本の子どもの幸福度について

武蔵大学 経済学部

森永専門ゼミナール 渡邊夏未

論文要旨

本研究は、日本とオーストラリアの学校制度や文化的背景などの比較を通じて、日本の子どもの幸福度について考察することを目的としている。先行研究の検討から、以下の3つの仮説を設定した。仮説1：日本の生徒の方がオーストラリアの生徒よりも、所属するコミュニティの数が少ない。仮説2：日本の生徒の方がオーストラリアの生徒よりも、幸福度が低い。仮説3：所属するコミュニティの数の少なさが、幸福度の低さにつながるの。である。

これらを検証するために、日豪の共学に通う、中学1年生～高校3年生までを対象に、「友人とのつながり」「教師との関係」「地域住民とのつながり」「居場所の多様性」「幸福度」の主に5つから構成される24問のアンケート調査をGoogleフォームで実施した。得られた回答を、平均値の比較、F検定、T検定、相関分析により、分析し、仮説を再考察した。その結果、仮説1は部分的に棄却/部分的に支持、仮説2は棄却、仮説3は部分的に支持された。本研究の成果は、どのような関係や関係構造が質として幸福に作用するのか、国ごとの学校体制や文化的背景によって異なることが示唆された点である。一方で両国ともに、質的な側面も伴った居場所の多様性が、幸福度に影響を与えている可能性があることも明らかになった。さらに両国ともに共通して、“質の高い”関係性→居場所の実感→幸福度という流れが存在しており、特に日本の生徒に関しては、友人関係が居場所実感につながり、学校における主観的幸福度に強く影響する可能性が示された。

これらを踏まえ、本研究では学校生活における子どもの幸福度を形成する要因を明らかにし、今後の学校運営や教育政策の改善に寄与する知見を提供することを目指す。加えて、日豪の学校制度や教育、文化の違いを理解し、改めて学校や教育について考えるきっかけとなることも目指している。